

RSK山陽放送ラジオ 朝耳らじお5・5

「永瀬清子の光を受けて」 vol. 7 二〇二二年九月二十日

一粒の蓮の実

小林章子（RSKアナウンサー）

伊藤正弘（RSKアナウンサー）

白根直子（赤磐市教育委員会熊山分室学芸員）

小林 この時間は、「永瀬清子の光を受けて」と題して、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらっしやる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。

白根 こんにちは。

小林 今日は、「敬老の日」ということで、永瀬清子さんのたくさん詩や文章の中から「老いること」にスポットをあてて選んでいただきました。どんな作品でしょうか。

白根 今日は、「一粒の蓮の実」という短章を紹介します。晩年の永瀬さんが後に続く皆さんにぜひ伝えたいと思っていたことを書いています。

一粒の蓮の実

「一粒の蓮の実を長く隠しておくことだよ」（鮎川信夫）

もし私が一粒でもいいから蓮の実をもっていたら、静かな場所、人知れぬ所がいいのにきまっている。

小さな池、小さな一生。そこがいいのにきまっている。

いま新聞をにぎわしているたくさんの事共は、時間をいそいでいるために起きたつまらぬ凶事はかりである。何千万円の（時には何億円の）借金を一時に払うための人殺しをはじめ、長い時間を一息でやりとげようとするための無理にみちみちており、「待つ心の欠乏」という悪が地上を占めている。

「ある朝ふと眼がさめ、南の風に蓮の花のあやしくあまい匂いを嗅ぐ時*」
がくるのを待とう。

時がほんの少しずつ達成していく事を信じよう。その花が自分の池で咲く事は夢であっても一心に待つ事だけは待とう。つまりそれが現代の悪に反している事なのだから――。

*タゴール詩集『ギータンジャリ』より

〔彩りの雲 短章集4〕一九八四年一月／『短章集続 焔に薪を／彩りの雲』詩の森
文庫 思潮社 二〇〇八年二月）

小林 これを読んで、私が一番思ったのは、子育てのことでした。働きながら子育てをしていると、子どもを保育園に送ってから出勤する。そんな慌ただしい朝には当然子どもを「待つ」ということができないのですが、子どもたちを叱咤激励しながら道を歩く様

子はまさに「一息でやりとげようとする無理」だったのかもしれないと。「待つ心」を持ってないということは「悪」なのだということも、ぐさりと心を貫かれました。でも、〈一粒の蓮の実〉が花開くことを待ちながら生きていくこと、時間がかかるということ、年を重ねるということは、そんなに恐れなくてもよいことなんだなという気持ちにもなりました。

伊藤さん、〈一粒の蓮の実〉を別の言葉で言い換えるとしたら、何でしょうか。

伊藤 努力ですかね。成功は一日にしてならずと言いますか、小さな努力の積み重ねがあつて成功という花が咲くのかなと感じました。白根 努力も才能のひとつと言われていますし、皆さんすてきな蓮の実を持っていらっしやるんだろなと思いつつお聞きしました。

この短章の冒頭にある「一粒の蓮の実を長く隠しておくことだよ」は、詩人の鮎川信夫さんの言葉だそうです。永瀬さんは、十七歳から詩を書きはじめ、詩という〈一粒の蓮の実〉を育てていました。そしてそれはすぐに実るような簡単な願ひではありませんでした。その頃、短歌や俳句は女性の教養として認められていたのに、詩を書く女性は少なかったたので、出発点からして困難な道を選んでいたので。

小林 そうだったんですね。〈一粒の蓮の実〉が、才能の芽のようなものだとしたら、永瀬さんにとってそれは「詩」だったのですね。

白根 はい。五十代の永瀬さんは、「詩人は何を報われるのか／だん／年齢と共に困難をますその仕事のために何を努力するのか」と

悩んでいました。この悩みに応えてくれたのは時間でした。つまり、永瀬さんにとっては書き続けていくことでした。

小林 「一息にやりとげようとする無理」をするのではなく、時間をかけて書き続けていったのですね。

白根 「一粒の蓮の実」は、永瀬さんが七十五歳の時に短章として発表しています。体が不自由になってしまった夫と生活を支えながら、新聞や雑誌などに寄稿し、世界連邦運動、岡山女性史研究会、詩画展、講演、朗読会などで、非常に忙しい毎日でした。

小林 永瀬さんは七十五歳になってもいろんな場所に出かけて、いろんな人の生き方を垣間見る中に、それぞれの〈一粒の蓮の実〉の可能性を感じられていたかもしれないですね。そしてもちろん、自身の中の〈一粒の蓮の実〉を見つめていらっしやったのでしょうか。

白根 そうだと思います。永瀬さんは、体の衰えは感じていても自分が老人であるとあまり思っていないませんでした。「なすべき仕事があり、人のため身のために一心に尽すことのできる状態が一番幸福」だと忙しくしていたため、年をとったと考える暇もなく、詩を書き続けていました。

小林 永瀬さんが晩年「老いること」について語った言葉がRSKに残っていました。

今はわりかた丈夫ですけど、もう5年か：くらい、それでもだんだん目が薄くなったり耳が遠くなったりしますから、今までのように、

今まで以上に、また書きにくくなるでしょうから、だから余計に
急ぐわけです。なんとかして自分の命のあるだけ、間に自分の思いを
いろいろ書いておきたいと。こういうことはやっぱり願っているわけです。

※記載されている情報は、二〇二一年九月二十日現在のものです。

白根 永瀬さんの願いを肉声で聴くと、活字とは違う驚きがありま

〈参考文献〉

永瀬清子「編集後記」『黄薔薇』第四十九・五十号 一九六二年九月

永瀬清子『いたわれ』と『いたわり』『国民生活』第十二巻巻第九号 一九

八二年九月

永瀬清子「一粒の蓮の実」『彩りの雲 短章集4』思潮社 一九八四年一月

永瀬清子『永瀬清子の詩のこころ そして詩』鳥越ゆり子 一九九四年十月

野三良訳 東雲堂書店 一九一六年六月」という詩集からで、最晩年にな
っても「最も好きな詩集の一つ」でした。

小林 十代の頃に読んだ詩集の中の言葉を大切にされていたので
ね。

白根 そうなんです。〈一粒の蓮の実〉は、いつかきつとという気持
ちを持ち続けることのすばらしさや、「時がほんの少しずつ達成して
いく事」、つまり「老いること」の意味や価値を、永瀬さんご自身の
生き方とともに教えてくれます。

小林 〈一粒の蓮の実〉、いい言葉に出会いましたね。

伊藤 そうですね。すぐには咲かないということですよ。

小林 歳を重ねたからこそ、いろんな経験を積んだからこそ、でき
る仕事というのは、きつとまだまだあるんでしょうね。白根さん、今
日もありがとうございます。

伊藤 ありがとうございます。

白根 ありがとうございます。